
特集 徳島県の医療と教育：その現在と未来

【巻頭言】

勢井宏義 (徳島大学大学院医歯薬学研究部統合生理学分野)
原田雅史 (徳島大学大学院医歯薬学研究部放射線科学分野)

平成27年3月、いわゆる「地域枠」の第1期生が卒業した。今回卒業した地域枠は5名であり、平成21年度の「経済財政改革の基本方針2008年」に基づいて増やした入学定員分である。徳島大学医学部医学科の入学定員は、平成21年度以降「緊急医師確保対策」, 「経済財政改革の基本方針2008」および「経済財政改革の基本方針2009」により、合計17名増員され112名となり、さらに「新成長戦略(平成22年6月18日閣議決定)」を踏まえ、平成23年度に2名増員し114名になった。現在、全国医学部の入学総定員は過去最大である。徳島大学医学部医学科に地域枠として入学する学生は推薦入試で選ばれた17名であり、そのうち、徳島県から奨学金をもらう特別地域枠は12名である。28年からは、毎年この12名の特別地域枠が卒業していくことになる。この奨学金の財源は、22年度からスタートした地域医療再生基金によるところが大きい。

県から奨学金を受けた学生は、卒業後、県内の公的医療機関等で奨学金貸与期間の2分の3に相当する期間、医師の業務に従事することになる。その医療機関とは、徳島大学病院をはじめ、県立中央病院、徳島市民病院、徳島赤十字病院、徳島県鳴門病院、麻植協同病院、阿南医師会中央病院、阿南共栄病院、阿波病院、県立海部病院、県立三好病院、つるぎ町立半田病院である。しかし、この義務年限期間は、初期研修や専門医研修など、医師

として成長する大切な時期でもあり、地域枠が将来の徳島県の医療を担うことを考えると、県内医療機関における教育体制はきわめて重要な意味を持つてくる。

そのような背景から、本集会在250回という節目の回であることも合わせて記念し、今回の公開シンポジウムは、「徳島県の医療と教育：その現在と未来」と題して、地域枠の医師が勤務することになる病院の中から7名の院長と、加えて県医師会長に集まっていた。発表順で、安井夏生徳島大学病院長、日浅芳一徳島赤十字病院長、住友正幸徳島県立三好病院長、永井雅巳徳島県立中央病院長、惣中康秀徳島市民病院長、荒瀬誠治徳島県鳴門病院長、川島周徳島県医師会会長である。人口の減少、高齢化、医師の偏在など、今後、徳島県の医療、そして初期研修を含めた医学教育はどうあるべきなのか、各院長からは、とても熱のこもった強いメッセージが続いた。地域枠に限らず、次世代の若手を徳島に定着させ、優れた医師に育てたいという想いは、シンポジスト全員が共有するものであった。本誌特集には、その抄録を掲載する。

徳島の医療のこれからは、決して暗い課題ばかりではないと確信できるシンポジウムだった。今後、徳島医学会が大学病院と県内各病院との連携の場として役立てられることを期待している。